

50年ビジョン懇談会 議事録 (第1回 まとめ)

日時：平成24年1月12日 PM2:00~PM5:00

場所：市役所4階402応接室

懇談会のテーマ

●日野の将来像の構築に向けた課題・問題・提案について

【馬場市長】

明けましておめでとうございます。まず、青山先生、細野先生、陣内先生には本当にお忙しいところ、この委員をお受けいただきまして、また、今日はお寒い中足をお運びいただきまして、まず冒頭感謝申し上げたいと思います。各先生方には、いろいろな角度で市政の運営にご支援ご協力を賜っております。重ねて御礼を申し上げたいと思います。厳しい時代ではありますが、何とか日野市はがんばって、近隣のまちに負けないような行政を進めたいと努力をしているところでございます。それで、この50年ビジョンの懇談会、こういうものを立ち上げたそもそもの思いと経過を、簡単にお話させていただきます。

一つ目として、来年の平成25年が日野市制施行50周年にあたるということです。50年という節目はおそらく一番大きな節目になるだろうと、そういう中でわがまちの過去の50年を振り返り、これからの50年をどういうふうにしていくのかということ、できるだけみんなで考えたい。その際に、市民だけで考えるのではなくて、もう少し大きな視野、あるいは長期スパンの視野に立って、しかるべき方々にお集まりをいただいて、そういう意見も聴いたほうがいいのではないかとということです。

二つ目は、大体70年から80年くらい前になりますが、当時の日野の為政者、農業者、篤志家が考えて、この不況の時代を、あるいは農業だけでやっていけないと思うので、工場を呼ぼうではないかということを決断して、いわゆる日野五社という会社を呼んだと、それがそれから後、ついこの間まで本当に税金に限らず、まちの活性化だとか雇用とか文化、スポーツなど幅広い分野で日野市の近代化といいますか、発展に寄与していただいた。ところがそれが、東芝日野工場が撤退する、多摩テックがなくなる、日野自動車の工場も近々移転すると、こういう状況になって、70年から80年前に基礎

がつくられた今の日野の原点が歪みつつある中、これをどうすればいいのかということです。

三つ目は、大震災以後、その前から環境面のことについて配慮しなければという話がありましたが、本格的に今の生活、暮らし、もっと大きくいうと今までの文明で大丈夫なのかという視点がでてきている中、今までのような行政について、根本的な見直しが必要だろうと、行政というもの、あるいは暮らしというものを考え直す、そんな時期が来たのではないかとことです。

さらに、80年前の日野の決断というものは、戦争の足音もある時代でありましたが、おそらく今以上にすごい不況だったのでしょう、職員の給料が払えなくなるだとか、まちがやるべき行政ができなくなったという時期で、ちょうど軍がこの日野の台地に大分関心を示していたようです。三多摩地域全般に、当時軍事産業も随分来ていたようですが、その一環として日野に、そういう軍事関係の先端技術の事業所を呼ぼうではないかということでした。当時、日野のメリットとしては、中央線が電化され、電車で人が通えるようになったこと。それから、日野はもともと地下水が豊富だということ。大月のほうに水力発電所ができて、高圧線がちょうど日野を通過しており、高圧線を使えば工場の電気が取れるということ、こういうふうな大きく三つくらいあって、それに軍の後押しがあって、工場の誘致ができたのかというふうに思うわけです。

これは、先ほどもちょっと申しましたけれども、まちの税収の面だけでなく、まちの人の職場を提供したし、まちに文化を植えたし、特にスポーツの分野なんかは、今でも企業スポーツが結構盛んでありますが、陸上部を中心に結構いいスポーツ選手が活躍したこともあって、日野の体育部門でもずいぶんリードしていった。あるいは、お祭りもつくれた。社宅もできましたから、地域社会もつくれたということで、かなり日野の発展には寄与したわけですね。おかげさまでという面がずいぶんあります。

ところが、その反面で、実はものすごく反省していることは、日野は工業でやってきたが、市民にはほとんど『工業都市日野』なんて発信してこなかったということです。やはり、ものづくりの日野というものを、もう一回市民のみなさまにご理解をいただいた上で、これから先どうするのか、ということをおもひで考えなければいけない。そんなことがあったわけでございます。いずれにしても、なかなか難しい時代で、市民や行政だけだと、どうしても短期的なものになるし、身近な自分の周りだけの視野になってしまっていて、全体を見通すことができない。私はあえて日野だけでなく、三多摩地域がど

うなっていくのかを踏まえた中で、そこで日野がどうしたほうがいいのか、そういうふうなことが考えられれば一番いいと思うところでございます。

ぜひ、先生方のそれぞれの研究とかお立場を通じて、50年後あるいは100年後を見通すこの地域を、あるいは日野をどのようにしていくのかというヒントをいただければ有り難いと思っています。大変難しい時代だけれども、私は今回の震災なんか見ていると、大変な時の日本人というのは意外と強くて、いいものをちゃんとつくってくれるのではないかというふうに思っています。そういう意味では、行政が発信すべきことは発信して、みんなで考えようよとすれば、市民はちゃんと反応してくれるだろうと思いますので、これからについて自由にご発言をいただければ有り難いと思っております。

【青山委員】

最初に工業の関係の話ですが、もうすでに関東平野の工業というのは、かつての高度経済成長時代の大規模工場の時代ではなくて、情報化とか中小化とかサービス化とか、いろいろな変化がもう20世紀からあったと思います。そういう意味で、日野はむしろよく大規模工場ががんばったという印象があります。圏央道沿いには、新たに張り付いている大規模工場があるのですが、それもやはりサービス化とか情報化という意味では、全体の傾向と非常に似ているのだと思います。今後の日野市で、工業について市民に発信するのはすごいいい発想だと思うんですけど、その場合には、やはりふたたび大規模工場を持ってくるのではなくて、そういう情報化とか中小企業化だとか、サービス化だとか、そういった動きを睨みながらどうするのかという議論になると思います。

東京はロンドンとかニューヨークとかに比べると、都市としてははるかに優れた都市です。地下鉄だとか空港だとか道路混雑だとかそういったあらゆる面で優れている。治安も優れている。清潔だし秩序だっている。いろんな意味で東京は優れているのに、何故東京が国際化されないのかというと、政府の規制が異常に厳しくて、特に外国企業の参入規制ですとかビザの発給制限ですとか、そういうのが厳しくて、なかなか国際化されていないという面がある。放っておけば、日本は急速な高齢化で衰退していくので、高齢化した社会を維持していくことはできないため、国の活力からみても、否応なしに国際化は進んできて、国際化していかざるを得ない状況になる。

これは一つの傾向だと思うので、やはり日本全体、あるいは東京全体もこれから国際化の中で食べていくという前提で考えたほうがいいのかと思います。そういう傾向にあることを客観的に見たほうがいいのかと思います。いろいろな意味で、日本は国際的な企業がビ

ビジネス的に活躍するには、非常に良い基盤を持っていると思います。特に東京は、後背地に消費もあるし、中小工業も、技術も従業員もたくさんあることが強みなので、そういう意味で、日野はもともと大規模工場があったということで、いい土壌を持っていますし、それを活かしていくことなると思います。日本は優れた労働力があるということが、海外から見たら相当魅力で、高い安いだけではないのです。優れた労働力があるというのは日本の強みであり、日本の工業や産業に対しては、決して悲観的ではなくて、日本の良さや関東平野の良さを活かしていくことを思考していくことが大事だと思います。

【細野委員】

中央集権、地方分権という話になると、国際化が水準として低いところは中央集権になっている。あるいは、中央集権が自分のコントロールメリットを高めるためには、国際化はなるべくしていかないほうがよいということになる。今、日本がこれからグローバル社会をどうやって生きるかっていうときには、やはり論理的に並立するのはやはり地方分権であるといえる。地方分権というのは、一面では地方自身が責任をとらなければならないということである。責任と同時に、それぞれが自分の特色をださなければならないとなると、かなり知恵を出さなければならない。その時に、行政だけが創意工夫をしてすべてやる、あるいは行政依存型の住民だけに頼るわけにはいかない。長いライフステージで日野に住んでくださる人たちに対して、どういう形のサービスを提供したらいいのか、考えなければいけない。と同時に、どういう役目を住民の人たち自身も果たさなければならないのか考えなければならない。そうすると、愛着が生まれてこなければいけないし、住むことの誇りというものも必要になってくるし、またそれをどういう形で市民の人たちに自覚してもらおうとか認識してもらおうという教育がとても大事になってくるような気がします。私は、とても人材づくりが大事で、学校教育だけでなく社会教育につながっていくと思います。そのあたりの特色が、市町村での都市間競争の中ではとても重要になってくるという気がします。

もう一つは、環境とか住まい方自身が生き方につながっていく気がします。そうすると、昔の工場と違って、騒音とか汚染物質がどうのこうのとではなくて、非常にクリーンになってきていて、そのクリーンさというものを維持した上で、ものづくりのまちを考えていく必要がある。また、リスク分散を考えなければならない。さらに、中小企

業で他業種、大きいものから小さいものまで、みんなこういっぱい入っている『ごちゃごちゃ感』があるほうが、本当にいいものが出てくる可能性があると思う。

これからの高齢化や健康のことを考えると、歩いていくことと車に乗ることをちゃんと区別して、移動システムを考えて美しいまちにできないかと思います。今まで私たちは、まちというものは『便利なまち』ということで考えてきたけれども、はたして便利というものとスローライフとかスローシティとかを考えてみると、はたして便利というものだけがいいのかと思います。それと魅力がなければ、そこから人も物も情報もみんなそこから出て行くことになる。ヨーロッパの街並みの美しさというのは、実はみんな我慢することから出ていると思います。我慢することが教育と考える必要がある。

【陣内委員】

日野は都内でも有数の水田地帯で、古くからの蓄積があり、しかも都心よりずっと人間の古い文明を先に築いている。ところが、ベッドタウン化してきたので、完全に従属している形になっている。そろそろ自立心をもつべきじゃないかと思います。今後は社会が縮んできて、さらに大学も含め都心回帰も起こっている中、地域を再編成していく上で絶好のチャンスであると捉えるべきで、今まで外の論理で日野が受け入れてきたものが、自立して考えないといけない時代になる。2000年の歴史があるそれぞれの地域が、自分のところの資産を活かし、知恵を活かし、人を活かし育て、愛着や誇りを育てる教育というものが重要だと思う。そういうことをそれぞれの地域がどうやって取り組んで、アイデンティティをつくり、みんなが自信を持って前に進んでいくかというシナリオをどうやってつくっていくかが勝負になると思う。

日野にはすごい資産がある。歴史的にも見ても、古いお寺が、あるいは新選組が出たのも偶然ではない。自由民権運動もここから生まれたというのも必然性があったというわけです。結局、やはり豊かな農村があって余裕が生まれ、知的な環境が育ち、そういうことがベースにあるからこそ、近代を切り開く人たちも生まれたということもあるし、形は東京の縮図と言ってもいいくらいに丘があり、丘陵があり、台地があり、斜面緑地には水がたくさん沸き、だから地下水が豊かで、多摩川と浅川があって、だから自然も多様で、生物多様性もあり、当然神社お寺も多い。日本では農地が冷遇されてきたので、戦後どんどん宅地化しなければいけなくなった。そもそも都市計画というものを大きく反省しなければいけないと思う。こんなに田園が豊かにあるのに、全部都市計画の論理で市街化しなければならなくなっている。これからは、人口が縮み、自然や農地を保存

できる時代が来る。もっと独立して自分の論理をつくれる時代なる。全体を高めて個性化していく論理を、リードしていく計画をつくり、その計画には新しい経済基盤としてものづくりがあり、情報や先端技術だけでなく、農業と連動したものづくりを検討していく。ものづくりのスピリットがなくなったまちは滅びると思う。大学を巻き込んで、クリエイティブな実験ができるフィールドとして、日本の一つの先端的モデルになってほしいし、なれる素材があると思う。

【馬場市長】

日野に住んでいる人は、ずっと農業をやってきた。基本的には東京で一番米をつくっていた地域で、昭和30年代まであり続けたが、この50年くらいで全部なくしてしまった。まさに内政的な論理ではなくて、外から来た論理でやらざるを得なくなったということです。ようやく、みんなもそれに気がついたので、環境運動が日野で盛んなのことも、もともとあるものをもう一回取り返そうよという住民の運動が強かったのだと思う。これから、それだけでいいのかということになると、それだけだと本当に元に戻ってしまう。そうではなく、先を見通さなければならない。そうすると、ものづくりや工業、商業も必要になり、うまく整合させなければならないと思う。

【陣内委員】

若い方とのバトンタッチが必ずしもうまくいかない面もあり、もう一回新しい形で水路や環境をやっていくことも意味を問い直しながら、ほかのまちづくりとか福祉とか誇りを持つ教育とか、全部結びつけてもう一回ダイナミックに展開していけばいいと思う。

【馬場市長】

大きなものに来てもらうという、そういう発想ではなくて、むしろ小さくて先端が行われているとか、環境を壊さずにかなり付加価値の高いものをつくること、それに対応できる優秀な人材は集まっていること、その辺をうまく行政がコーディネートできればいいと思っている。

【青山委員】

海外の電力関係者から見ると、あれだけの震災があったのに、東京23区はほとんど停電しなかったのが、日本は逆にすごいことになっている。日本人の感覚とかなり違い、日本の評価はすごく上がっている。また、これからの土地活用は『楽しさ』だと思

う。『楽しみ』がお金になる時代で、成熟社会というのは、経済成長はしなくても人々が楽しみを求めてやまない社会であり、東京都は臨海副都心の活用実例で実感している。

【陣内委員】

アミューズメントセンターみたいな要素が重要になってくるのではないかと思う。

【馬場市長】

日野が工業都市であるということも市民は知らないけれども、観光とかも結構やってきたことも意外と知らない。例えば、高幡不動には年間何百万人もの人がきているが、それを活用しようとする人がいないし、そのようなまちであることを知らない。

【陣内委員】

工業なら工業、自然系なら自然系、神社なら神社などそれらが別々に分かれていた。行政の中でも専門家の中でも、市民の中だって分かれていた。ところが、近いところで重なっているわけです。それが地形とか自然の条件によってうまく関係させながら風景をつくってきているわけで、そういうものを『回遊』できる、つないでいくネットワークをつくるのが大切である。

【馬場市長】

外側の論理ではなく、内側（日野）で出していくと、うまくリンクできるかもしれない。

【陣内委員】

大規模跡地は、細かく割られてしまうとうまくいかず、環境が悪くなる。大きい力を持った経済力のある組織、団体、国、あるいは民間でも大きいところなど、跡地をうまく資産を受け継ぎながら財産を活用して新しいものづくりにしてほしい。

【馬場市長】

大規模工場跡地の活用について、『楽しみ』という視点で発想することはもっとあってもいいと思う。

【陣内委員】

高円寺の阿波踊りを研究した社会学者が、昔からあるものが残っているのが伝統ではなくて、みんなつくられているので、伝統とはつくることができるものである、と言っていた。特に日本はそういうつくり出す生産力があるので、場所とお祭りのタイプと担う人たちの組織、ネットワークが新しくつくればなんか出てくる可能性がある。

若い人たちの間では、自然な形で、自然への尊敬とか日本の伝統とかそういうものに広がってきている例もある。

【馬場市長】

これからはまちを観光等で歩いていただける方々のことを眼目において、まちを整備していくと結構売りになるのではないかと思う。

【青山委員】

『歩ける』『座れる』『夜遅い』が商店街反映の条件だと思っている。実は、阿波踊りだけが当たっているわけではなく、高円寺は夜遅くまでご飯を食べられるまちだから栄えているのです。

【陣内委員】

若い女の子たちに気楽に行くところは、くつろぎながら刺激がある、いろんなタイプの小さい店がいっぱいある、ごちゃごちゃ感があって、整頓されたすっきりした秩序とかの美しさがない。居心地がよく、居場所がある。だから、大規模開発はつまらなくて、高円寺型が受けている。特に地方都市は、都心部が空洞化してシャッター街やいい街並みがあるけど寂れて活力がない。しかも、今度は郊外も田園を食い潰して、田園がダメになり都市もダメになり両方ダメになっている。日野も下手をするとそうになってしまう危険性がある。

これからはリノベーションで、古い建物をうまく生かしてみんながフィットする、記憶もあるから過去とつながっている。もう一つが、田園の発見、自然との対話だと思う。ヨーロッパが辿ってきたように、文明が行き着く段階で、特に成熟した国の人たちは、田園や自然を求めるのが当たり前になる。その両方が輝くようなそんな組み合わせがほしい。

【馬場市長】

水路があるのがものすごい日野の財産であると改めて思っている。

【青山委員】

ボストンにはフリーダムトレイルという印があり、これに従って歩くと旅行者が名所を見逃すことなく観光できる。このくらい旅行者に親切さが無いといけない。

【細野委員】

地域のつながりをもう一度戻すには、もしもその伝統があれば再発見するというように、なかったら伝統をつくるという、これは大事なことです。

活気のない商店街で、商店街の若者がイベントの開催でお客をたくさん呼んだ。年寄りの店主は、商売はお客が来ないとやる気が出ないことが改めてわかって、イベントの開催でお客を呼んでくれた若者を再評価し、そんな中でまちづくりのリーダーが出てきたりする。伝統を作り上げることはとても大事なことで、コミュニティをもう一回つなげるという意味でもこういったイベントを使うとかは、とても大事なことである。

【陣内委員】

コミュニティは、昔は生きていくために、例えば農業をやるために、いっしょにやらないと話しにならなかったから、あるいは都心だと、火事から守るだとか、いろいろ生活して暮らしていくために必然性があったり成り立っていたのですが、もうそれがなくなってしまっている。だけど、みんなつながりたいと思っているわけで、どういうものが結集軸として、現代コミュニティの魅力あるそういうものになりうるかということだと思ふ。

最近の成功している市民活動のリーダーは、アラフォーの女性が多く、しなやかに強く感度がいい。自分たちがコミュニティのために交流のためにやっている。結局、コミュニティがみんなほしいというか、それと環境問題と農業とつながって、家族・近隣ともつながっていく。団塊世代も含めて、みんな地域につながっていきたいと思っている方が相当おられると思うんです。

【青山委員】

商店会っていうのはコミュニティを担っている。都市型のコミュニティというのは、農村コミュニティとはまったく違う都市コミュニティをつくってきた。昔の町会と今の町会は違う町会・自治会で、戦後まさに新たに伝統をつくってきて、地域の防犯とか防災とかイベントとかすごくいい物を持っている。それを担っているのは、実は商店会だと思っている。自治体が商店会振興に力を注いで、財政的に支出することは、当然のことで、いくらやってもいいと思うのです。基礎自治体にとってコミュニティがもっとも大切で、それを担っている商店主を養っていくのはすごく大事なこと。海外での孤独死（熱波）の例では、商店が衰退している地域において孤独死率が高い、という相関関係があった。それは、商店がコミュニケーションセンターを担っているからで、我々の実感から言っても、町会長なんかは地域の職人さんだとか商店主だとかが非常に多い。

孤独死は近代社会、現代社会では許されてはならないと思う。人間の尊厳を損なうのです。孤独死防止は、コミュニティにみてもらうのが一番。商店会振興に対するとか、自治会や町会に対する補助金やいろいろな仕事を委託してお金を流すということは、すごく大事なこと。

高齢化というのとシングル化というのと両方来ている。日野市の50周年をやるのであれば、再びコミュニティとか商店会を大切にすると、官制ではいけないが、町会でも自治会でもコミュニティでも団地の管理組合でもマンションの管理組合でも人が集まる自主的な組織は大切にしていくこと。自治体が、特に職員が強く意識すること、そういう風土が市役所側にも必要だと思う。

【陣内委員】

昔の店舗をリノベーションして、自分たちの手づくりでやっている、もう少し活性化に寄与していくと思う。日野も周りに大学があるのだから、もっと商業だとか飲食店が盛んになると思う。

【陣内委員】

イタリアでは、キロメートルゼロが合言葉になっていて、生産地と消費地を0にする、これが理想的である。ほとんど地産地消で、移動距離が0で、すばらしいキャッチフレーズで、住民も知っている。経済の自立性から言っても、地元のものを使う・食べる・楽しむ、これは原則じゃないかと思う。

まちの機能を農業だけではなく、活動の機能にてこ入れをして、みんなでがんばるといふ雰囲気はまちの人が、みんなで共有するということがないと愛着が生まれない。

【馬場市長】

今度、豊田にイオンが来ることになったが、それを核にしてちょっとよそにはない、しゃれた街並みあるいは商店街ができないかと思っている。

【細野委員】

スマートハウスとかスマートシティ構想とかを工場の跡地でやって、すべてここで、エネルギーからなにから全部ここでできるようなもの、環境にやさしい、そのようなものがないかと思う。環境循環型にするとか、いろいろ考えたら面白いのではないかと思う。

質のいい教育を日野市が設計したりすることで、どういう形で、どういう人たちに住んでもらおうとするのか、そのためにどういふベースをつくりますというプランニングが必要と感じる。

【青山委員】

東京都は、1997年の基本構想のキャッチフレーズは、『生活都市東京構想』で生活の質を高めるのが一つの柱だった。これからは、量的な充足の時代ではないと、生活の質を高める時代だと。もう一つが、都市としての活力をどう維持していくのかと、これが柱であった。人口が減っていく中で、一挙に都市としての活力が失われていくと、福祉もできなくなり、そういう問題提起をしようとした。

【陣内委員】

東京は、全体として多様性が世界的にもある都市で、これは23区中心部でも多様な、下町があり、山の手があり、盛り場があり、自然な場所があり、多摩地域まで含めると本当に多様な一つのエリアだと思う。

ヨーロッパでは、80年代に入った頃から景観とか風景という言葉が急に出てきたが、これは都市の風景ではなくて田園の風景だった。人間とのコラボレーションとしての風景・景観、これが文化的な価値がある。ゆとりのある生活で周りに自然があって田園があって、そこに近くに職場があるってということが整ってくればいいのではないかと思う。

【青山委員】

ヨーロッパでは100年前に田園都市を作ったが、100年ぶりに田園都市の時代が来たのかもしれない。都市の中心部が非常に無機質化していて、そこでは休まらないというがあるので、ふたたび田園都市をとった経緯がある。

【陣内委員】

まちづくりにおいて、中小工場でも観光でもアミューズメントでもなんでもいろいろなものが入っているほうが良いと思う。そのほうが時代に強い。

遊びは、都会的な盛り場的な遊びもあるけれど、日野ではもっと自然のなかで遊ぶというのがいっぱいあると思う。

【細野委員】

成長には方程式がある。一つは人口の上昇と、もう一つは一人当たりの生産性。人口は需要を作り供給を支える。生産性はどういう人が住むか、またその誘導をどうするかということが大事になってくる。

人口を増やすことは、職をつくることなので、職住近接という形をどうやってしていくのかが大事。

人生が90歳代で終わるとすると、60歳代から80歳代までの20年間の人口に、どうやって活力を出して行こうかということが大事になってくるし、自分たちの経済の循環の中で、役目を果たせるかという感じが必要になる。

職住近接の大事なことは、女性の職場、働き口をどうやってつくるか、それが人口の成長率に関わってくるわけで、それが地域の経済成長率に関ってくるので、どういう働き方させるか、ライフステージに工夫すれば一人当たりの生産性も上がってくる。また、子育てもキャリアの形成もとても大事で、両立できないことはない。

【陣内委員】

社会的環境の気運として、行政は、子育てに力を入れている企業をちゃんと支えますというメッセージを、企業に出していく必要がある。

また、国際化っていう話の中で、外国人の力に頼らないと日本の活力がなくなってしまうと感じる。

【青山委員】

雇用の場をつくっていくということに行政が努力しないといけない。そのために、本来行政の仕事もシティセールスだと意識を変える必要がある。日野は、店やビジネスに対して非常に環境がいいし、まちもきれいで非常に適していると感じる。

【細野委員】

シティセールスしていかないと都市間競争に結構埋もれてしまう。

【馬場市長】

シティセールスはおそらく日本人の下手なところというか一番やらない。

【青山委員】

日本は企業も行政も別々で、これからはいっしょにシティセールスをやる時代。いっしょにやれば、立地している会社だって離れがたくなってくる。工業の誘致については、税制優遇するというだけでは企業は来ないし、実態として成果があまり出ていない。

道州制や合併を考えると、財政的な損得で考えたほうがいい。その点では23区と分かれないうほうが良い。

【細野委員】

今後、三多摩地域は効率性から捉えると、半分くらいになると思われるが、そうした場合、キャスティングボードを握れるかどうかがとても大事。50年ビジョンでは、どういう形をつくっていくべきかを考えなければいけない。

【青山委員】

日野市民としての自治意識が定着しているから合併するのは無理。規模も適正規模であり、無理に合併をすると市政はめちゃくちゃになる可能性が高い。

【陣内委員】

日野の愛着とかプライドとか、そもそもほかの地域と違うとか、ますますそう思うように10年くらいかけて育てていくのが良い。

【青山委員】

無理な合併をすると、地域を把握できず悲劇が起こり、合併補助金で無駄な施設をつくり、また以前の長を特別職で採用したりもしている。ほとんど合併した意味がない状況である。昭和の合併のときに、財産区がたくさんできたのと同じです。

ただ、日本全国の自治体は困っていて、行政を維持できなくなっていたので、今回の平成の大合併は全体としてはやらざるを得なかったと思っている。

【馬場市長】

われわれは、そうならないように行政も市民も含めて、自分たちでやっていきますと、そのようなスタンスを持てるようにしないといけない。

【陣内委員】

やはり、一つ一つが基礎自治体として個性を持っていて、その辺の地域で連合するという二重構えが良いと思う。緩やかなネットワークの地域ができて、だけど基礎自治体は、しっかりとある規模で収まって、個性を発揮している。個性が発揮して、違う同士がなれば仲良くなれるのだが、同じもの同士が競合すると仲良くなれない。その理屈はなんかあると思う。独自の生き方を。21世紀の田園都市を日野に。その中で、やっぱり適切な規模とアイデンティティを保っている。

日野は、地形のまとまりがいい。この地形がもたらしている多様性と恵みというのをもっとアピールしていく。歴史があるこのまとまりは絶対に失わないほうがよいと思う。